［翻訳］

ソログープ「少年リーンの奇跡」

竹 田 円　訳

神なる皇帝の肖像の御前にいけにえを捧げ，恭しく頭を垂れることを拒んだ反抗的な村の，強情な村人たちを鎮圧せよという命令をみごとに果たした騎士たちの一行が自分たちの野営地に引きあげて行くところだった。多くの血が流され，多くの不心得者が成敗された。疲れ切った騎士たちは，愉楽の時間の訪れをうずうずと待っていた。野営地のテントに戻ったら，謀反人たちの村から連れ帰る，罰当たりな愚か者どもの妻や娘たちの美しい体を心ゆくまで堪能しよう。娘や女たちはすでに快楽を味わっていたが，せっかちな騎士たちの手荒な愛撫が行なわれたのは，破壊され焼きつくされた村のはずれで，そばには女たちの父親や夫の四肢をもがれた骸（むくろ）が転がり，棒や鞭でさんざん打ちのめされた老母たちが血まみれの体を横たえていた。女たちは兵士たちに欲されるほど，言うことを聞かなくなり，無理やり抱かれるはめになったが，今やぐったりとしたその体を重い荷車に堅く縛りつけられていた。荷車は力持ちの馬たちに引かれ，広い道をまっすぐ野営地に向かって進んでいた。騎士たちは自らまわり道を選んだが，それは年寄りの隊長が，謀反を起こした村人の中にまんまと姿をくらまし，こちらに逃走している者がいると聞きつけたからだった。皇帝の名誉と体面を守ることに熱心な兵士たちの勇ましいはたらきで，剣は血で赤く染まり，刃はこぼれ，槍の先は丸くなっていたが，ローマ軍の剣は，敵をいくら倒そうとも温かく脈打つ新たな人間の血を求めて飽くことがなかった。

暑い日だった。そして一日のうちいちばん熱い時間，正午を過ぎて間もなかった。雲ひとつない空は容赦なく輝いていた。炎の霧に包まれた天空のドラゴンは全世界の狂気の怒りに身を震わせ，静まり返る陰気な平原に，燃えさかる口から灼熱の怒りの筋を吐きだしていた。干からびた草が，渇ききってむなしく水を待つ大地にへばりついていた。草は，大地とともにふさぎ，やつれ，しおれ，埃で喉を詰まらせた。馬の蹄の下から灰色の埃が舞い上がり，そよともしない大気の中でかすかに動く雲となり，ひらひら体を揺すった。埃は，疲弊した騎士たちの武具の上につもり，武具は鈍く深紅に光った。灰色の，微動だにしない埃の雲を通して見える世界は，疲れ切った騎士たちの目にはまがまがしく，陰気で，悲しみに沈んで映った。憤激したドラゴンに焼きつくされた大地は，蹄鉄を打ちつけられた重い蹄の下で，おとなしく，無気力に横たわっていた。人気のない埃っぽい道は，蹄鉄を打ちつけられた重い蹄の下で，低くうめき，体を震わせた。ときたま，みすぼらし

いあばら屋が並ぶ貧しい村に行きあったが，うんざりする厳しい暑さのせいで，老隊長は道をくまなく捜索するという当初の目的を忘れ，鞍の上で規則正しく体を揺すられながら，むっつりと考えていた。いつかこの暑さにも，えんえんと続く長い道のりにも終わりがくるだろう。そうしたら軍馬を預け，兜を脱ぎ，盾を下ろそう。広々とした天幕の中は涼しく，やすらかな明かりに照らされているだろう。そしてふたたび，裸の女奴隷は泣くのだろう。横笛のように甲高い声で，愚痴を言い，耳慣れない奇妙な言葉で嘆き悲しみ，泣き，しかし接吻するだろう。そうしたら女を愛撫してやろう。死ぬまで可愛がってやるのだ——二度と泣かないように，嘆かないように，愚痴を言わないように。横笛のように甲高い声で，殺された者たちのことを，愛する者たちのことを，偉大なる皇帝の敗北した敵たちのことを話さないように……。

若い兵士が隊長に話しかけた。

「ほらあそこ，右側の，道のそばに，人集(ひとだか)りが見えます。マルケルス隊長，どうかやつらを襲い，追い散らすように命令してください。そうすれば，私たちの速馬で，厳しい暑さに眠りこんでいる風を目覚めさせてやりましょう。そうすれば風は，あなたからも私たちからも，ほこりにまみれた倦怠を吹き払ってくれましょう」

隊長は，若い兵士が指示した方角に目を凝らした。年老いた隊長は目がよかった。

「いいや，リュツィリイ」隊長は微笑んで言った。「あれは子どもたちだ。道のそばで遊んでいるのだ。追い散らすには及ばぬ。男の子らには，われらの堂々たる馬と，勇敢な騎士の姿を見せてやろう。そして，幼いうちからその胸に，偉大なるローマ軍と，栄(は)えあるわれら無敵の神なる皇帝の前には恭しく頭を垂れるものだと刻みつけてやろう」

若い騎士は，隊長にあえて異を唱えることはしなかったが，その顔は暗く翳った。彼は不服そうな様子で持ち場に引き返し，友人である同じ年頃の青年に耳打ちした。

「あの子どもらは，謀反を起こした，ならず者の子孫かもしれない。俺なら喜んでやつらを斬り刻んでくれるものを。俺たちの隊長は，年のせいでずいぶん感じやすくなって，名誉ある戦いに不可欠な断固たる決断力を失ってしまった」

しかし，彼の友人もあきらかに賛同しかねるという口調でこう答えた。

「どうして子どもたちを相手に戦わなくてはならないのだ？　そんな戦いのどこに栄光がある？　自分を守ることができる連中と戦えば十分だ」

若くて怒りっぽい兵士は，いまいましさで顔を真っ赤にして口を閉ざした。

騎士たちの一行が遊んでいる子どもたちに近づいた。すると，道端の子どもたちは遊ぶのをやめ，兵士たちを見，その堂々たる馬と，きらきらと輝く武具，男らしい日焼けした顔に肝を抜かした。

子どもたちは驚き，小声で囁き交わし，目を大きく見張った。子どもたちの中でただひとり，美しい少年リーンが，暗い顔で兵士たちを見ていた。黒い瞳は聖なる怒りの炎で輝

いていた。そして，騎士たちの一行が子どもたちのいる場所まで来たとき，少年リーンは叫んだ。

「ひとごろし！」

　そして脅すように両手を高く上げ，その手を隊長の方に突き出した。老隊長はむっつりとした顔で少年を見て，少年が何を叫んだのか聞き取れないまま，通り過ぎた。

　怯えた子どもたちはリーンを取り囲み，叫ぶのをやめろとたしなめ，小声で言った。

「一刻も早く逃げよう。さもないとあいつらに皆殺しにされてしまう」

　女の子たちはすでに泣いていた。しかし，美しい少年リーンは，大胆不敵にも前に進み出て，大声で叫んだ。

「処刑人！　罪なき者たちを苦しめる者たち！」

　そしてふたたび，脅すように，固く握りしめた小さく非力なこぶしを高く上げた。そして，怒りを湛えた黒い瞳をきらきら輝かせ，全身をわななかせ，怒りに喉を詰まらせながらも，いっそう声を張り上げた。

「処刑人たちよ！　おまえたちに殺された者たちの血は，どうしたって，その手から洗い流すことはできないぞ！」

　女の子たちが声を張り上げて泣いたので，少年リーンの叫び声はかき消された。男の子たちは，リーンの腕をつかみ，道から引き離そうとした。しかしリーンは彼らの手をふりほどき，聖なる怒りに身を焦がし，偉大なる皇帝の兵士に呪いの言葉を浴びせた。

　騎士たちは歩みをとめた。若い兵士たちは声高に叫んだ。

「こいつらは謀反人の子孫だ！　その心は謀反人の魂に汚染されている！　根絶やしにしなくてはならない。ローマ兵を侮辱する者たちの住処はこの空の下にはないのだから」

　古参の兵士たちも隊長に訴えた。

「このごろつきどもの無礼は厳罰に値します。隊長殿，われわれに，こいつらを追いかけ，皆殺しにするようにお命じください。彼らが大人になって，反乱を起こし，神なる皇帝と世界の支配者たるローマに大きな害毒を引き起こす勢力になる前に，謀反人の種族を根絶やしにする必要があります」

　隊長は言った。

「子らをひっとらえよ。叫んだ者は処刑せよ。だが，残りの者たちは，ローマ兵を侮辱したらどうなるか，生涯の最後の日まで忘れられなくなるように罰すればよい」

　そこで，騎士たちはみな埃っぽい道を外れ，蜘蛛の子を散らしたように逃げまどう子どもたちを追いかけて馬を駆った。

　追手を見て，少年リーンは仲間たちに叫んだ。

「僕を置いて行け。きみたちに僕は救えない。走って逃げたところで，みな，この罰あたりで非情な兵士たちの剣に殺されるだけだ。僕がやつらのところへ行こう。僕一人だけ殺

されればいい――僕は，こんな残酷な仕打ちが行なわれる，けがらわしいこの世界になど生きていたくないのだから」

そう言って，リーンは走るのを止めた。リーンの仲間たちも走ったのと恐怖とで力尽き，それ以上リーンを引っ張って走ることはできなかった。そこで彼らもその場に立ちどまり，大声をあげて泣いた。そうこうしているあいだに，騎士たちはすばやく密集した円陣を組み，子どもたちを取り囲んだ。

鞘から抜かれた剣が，太陽の光を受けてきらりと光った。ちらちらと揺れるドラゴンの微笑み，冷酷で悪意ある微笑みが，鋼の太刀に光った。子どもたちは体をぶるぶる震わせ，大声で泣き，身を寄せ合い，小さくひとつに固まった。ドラゴンは殺戮をせかした。燃えたぎる兵士の血を焚きつけ，赤く充血した兵士たちの眼を怒りの赤紫色の煙で覆った。ドラゴンは喜んでいた。その蛇の目の容赦ない光で罪なき子どもの血に接吻し，残酷な幅広い太刀に斬り刻まれる無防備な体に，天の悪意の膿んだ熱を浴びせる準備はすでにできていた。しかし，子どもたちの間から，少年リーンが大胆にも進み出て，隊長に歩み寄り，よく響く声でこう言った。

「おじいさん，わたしはあなたとあなたの部下たちを，ひとごろしと，処刑人と呼んだ。わたしはあなたと，あなたと一緒にいる者たちを一人残らず呪う。あなたたちのけがらわしい心に正義の神の呪いあれ。見るがいい，ここにいる子どもたちは，恐怖に泣き，震えている。恐れているのだ。あなたの罪作りな命令で，あなたの呪われた部下たちが，わたしたちを，そしてわたしたちの父と母を皆殺しにするのを。わたし一人を殺すがいい――この子たちは，あなたとあなたを遣わした者に従順だ。殺すのはわたし一人でじゅうぶんだ。あなた方は，どれほど人を殺しても飽き足りないのかもしれないが。わたしはあなたなんかこわくない。わたしは，あなたの怒りを憎む。あなたの剣を，あなたのよこしまな力を軽蔑する。わたしはもうこんな地上に生きていたくはない。激情に駆られた兵士たちの馬に踏み荒らされたこんな地上に。わたしの手はか弱く，背は低い。あなたの首に手を伸ばして，首を絞めることもできないほどに。わたしを殺せ，さあ早く」

老隊長は，リーンの言葉にひどく驚いて言った。

「蛇の子らよ。おまえの言う通りにはならん。死ぬのはおまえ一人ではない」

そして，部下たちに命じた。

「子らを皆殺しにせよ。蛇の子孫を一人たりと生かしておくな。このあつかましい小僧の言葉が，この謀反人どもの心に刷り込まれたからだ。皆殺しにせよ。大きい者も小さい者も。片言を話し始めたばかりの子も逃がすな」

それを合図に兵士たちは子どもたちに襲いかかり，非情の剣で斬った。子どもたちの泣き声を聞いて，陰気な谷も埃っぽい道も体を震わせ――それに応えるように霧深い彼方でうめき声が響いた――それは，横笛のようにやさしいこだまとなって，うめき，沈黙した。

馬たちは熱い鼻孔をふくらませ，湯気をあげている血の匂いをかぎ，蹄鉄を打ちつけられた蹄で，ゆっくりと重々しく，子どもたちの亡骸を踏みつけた。

兵士たちは道へ引き返した。楽しげに，無情に，笑いながら。自分たちの野営地へ急いだ。陽気に軽口をたたき合った。愉快だった。

だが，埃っぽい苛酷な道は，ドラゴンの怒りに炎と燃える瞳の下でふさぐ谷間の中を果てしなく続いた。赤紫のドラゴンは傾きはじめたが，涼しくなる気配はいっこうになく，沈黙と恐怖に魔法をかけられた風は眠っていた。そして，灼熱のドラゴンの赤紫の顔は傾きながら，老いた隊長の鋭い目を見て――天の蛇は，静かな，恐ろしい微笑を浮かべた。

静かで，暑くて，大気は赤紫色に染まっていた。規則正しい馬の蹄の音があまりにも単調で，老隊長は気がめいり恐ろしくなった。重い馬の歩みがあまりにも単調で，足音がよく響くため，微動だにしない，絶望的な埃が，あまりにも細かく灰色であるため，人気のない道の倦怠と恐ろしさが無限に続くかと思えた。そして，人気のない彼方は，疲れた馬が一歩進むごとに，よく響く唸り声のこだまを返した。

はるか遠くの人気のない場所で，よく響く唸り声がした。

蹄の下で，大地が唸った。

誰かが走って来て，追いついた。

そして声が，殺された少年の声によく似た声が何ごとかを叫んだ。

隊長は部下たちを振り返った。埃にまみれた騎士たちの顔がひきつっているのは，疲れのせいばかりではなかった。日に焼けた兵士たちの荒々しい顔の造作に，ぼんやりとした恐怖が影を落としていた。若いリュツィリイの渇いた唇が動いて，不安げに囁いた。

「一刻も早く，野営地にたどり着きたいものだなあ！」

老いた隊長は，リュツィリイの疲れた顔をじっと見て静かに尋ねた。

「リュツィリイ，どうかしたのか？」

リュツィリイは声を潜めて答えた。

「怖いのです」

青年は自分の恐れと弱さを恥じ，声を張り上げて言った。

「やけに暑いなあ」

そしてふたたび恐怖に襲われ，声をいちだんと潜めて囁いた。

「あのいまいましい小僧が私たちを追いかけて来ます。夜の魔法使いの不浄な魔法にかけられているせいで，私たちにはやつが二度と起き上がれないように，斬り殺すことができなかったのだ」

老隊長は注意深く周囲を見渡した。近くにも遠くにも人の気配はなかった。隊長は，若いリュツィリイに言った。

「海の向こうの大神官がくれた護符を失くしたのか？　あの護符を身につけていれば，真

夜中の魔法使いの魔法であれ，真昼の魔女の魔法であれ，けちな魔法は寄せつけないと聞くぞ」

リュツィリイは，恐怖に体を震わせて答えた。

「護符は身につけておりますが，その護符が私の胸を焼いているのです。冥府の神たちが私たちに近づいてきます。彼らの暗いつぶやきが聞こえます」

谷が重々しくうめいた。老隊長は，おのれの恐怖を克服しようと，神におもねる言葉を口にした。

「冥府の神たちは私たちに感謝しておられる。私たちは今日，彼らのために十二分に働いたのだからな」二人の声は低く歯切れが悪かった。隊長は燃えるように暑い沈黙の中で恐ろしくなった。しかし，恐怖を克服できなくては勇猛なローマ兵の名がすたる。

しかし，若いリュツィリイはふたたび言った。

「怖いのです。私たちを追いかけて来る少年の声が聞こえる」

すると谷間の暑い沈黙の中で，横笛のようによく通る声が響き渡った。

「呪われろ，呪われるがいい，ひとごろし！」

兵士たちは身震いし，馬たちは速足で駆け出した。不思議な声は，すぐ近くではっきりと響いた。

「ひとごろし！　罪なきものを殺したものたちよ！　おまえたちがどうして許され，慈悲をかけられよう」

馬たちは鞭をあてられて疾走した。しかし，老隊長の胸は怒りの炎で燃えた。彼は，怯えて先を急ぐ馬の足を止めて，騎士たちのほうを向いた。

「はてさて，われらは偉大な神なる皇帝の戦士ではなかったか？　われらは誰から逃げているのか？　われらが息の根をとめそこねたか，はたまた夜の魔術のために杯に血を集める，邪悪な妖術使いの不浄な魔法で蘇らされたいまいましい小僧からか？　やつは無敵の軍団に罵声を浴びせ続けておる。だが，ローマの剣は，敵の兵士だけでなく，邪悪な悪魔の魔法にも打ち勝たなくてはならない」

兵士たちは恥入った。馬を止め，耳を澄ました。何者かが，彼らに追いついた。そして厚い夜のとばりが下りた谷間の霧深い静寂の中に子どもの声が響いた。それは断固とした宣告であり，死者を悼む泣き声でもあった。

「ひとごろし！」

騎士たちは声の方へ馬を引き返させた。そして彼らは少年リーンの姿を見た。血に染まり，引き裂かれた服を着て，彼らをめがけて駆けて来る。少年の顔や手には血が幾筋も流れていた。少年は脅すようなしぐさで両手を兵士たちの方に伸ばした。まるで，兵士たちを一人ずつ捕まえて，血と埃にまみれた自分の足元へ引き倒そうとするかのように。兵士たちはたけり狂う憎悪に胸をたぎらせ，剣を抜き，鋭くとがらせた鐙で馬の腹をせわしな

く蹴ると勢いよく少年に突進し，少年を剣で斬り裂き，踏みつけ，その遺骸の上で憎悪をさらにふくらませて，馬から飛び降り，その体を細かく斬り刻み，道とその周辺に撒き散らした。

それから剣を道端の草で拭い，馬にまたがって，ふたたび野営地を目指して馬を駆った。しかしふたたび，傾いていくドラゴンの光の中で，闇に沈んだ谷間に悲痛なうめきがこだまし，号泣する横笛のような声がまたしてもあの容赦ない言葉を告げた。殺人者たちの耳の中で泣き声が鋭く響いた。

「ひとごろし！」

恐怖と憎悪にさいなまれた兵士たちはふたたび馬の向きを変えた。するとまたもや，血に染まった服を着た少年リーンが駆けよって，兵士たちの方に血だらけの手を脅すように差し伸べた。ふたたび男たちは少年を斬り裂き，踏みつけ，その体を剣で斬り刻んで，撒き散らし，疾走した。

しかし，何度も，何度も，少年リーンは彼らに追いついた。すでに兵士たちにはどちらの方角に自分たちの野営地があるのかも定かでなかった。そして際限なくくり返される殺戮の怒りで胸をいっぱいにして，途切れなく続く非難の泣き声がこだまする中，谷間を駆け回り，少年リーンと子どもたちが殺された場所の周りをぐるぐる走った。そして，日の残りはすべて，赤紫色に燃え，くすぶりながら息も絶え絶えのドラゴンは，憤怒に燃える容赦のない目で，永遠の殺人者と，終わりなき責めの恐ろしい苦悶を見つめていた。

夕焼けが燃え尽きて，夜が来た。はるか彼方では，汚れない，無垢の星星が瞬いていた——兵士たちは駆け回り，少年リーンは際限ない叫びで彼らを苦しめた。兵士たちは駆け回り，少年を何度も殺し，しかしとどめを刺すことはできなかった。

日の出前，恐怖に追い立てられ，少年リーンの永遠に続くうめき声につきまとわれて，兵士たちは海岸へと疾走した。狂ったように走る馬の蹄の下で波が泡立った。

こうして，兵士たち全員とマルケルス隊長は死んだ。

一方，少年リーンと子どもたちが騎士たちに殺された道の近く，はるか遠い荒野では，彼らの亡骸が，血にまみれ葬られることもないまま，横たわっていた。夜，その亡骸に，おずおずとオオカミたちが忍び寄り，子どもたちの汚れなき甘美な骸を心ゆくまでむさぼった。

＊「少年リーンの奇跡」について

この短編小説は，1906 年，雑誌『Весы』第 2 号に掲載され，のちに「Отрок Лин」（少年リーン）と改題された。

フョードル・ソログープは，1894 年に短編小説「光と影」でデビューして以来，子どもを主人公とする短編小説を数多く発表し，「俗悪な世間を象徴する大人によって無垢なる子どもが汚され破滅する」という図式をくり返し描いた。「少年リーンの奇跡」も，ローマ軍の兵士たちによって罪のない子どもたちが殺されるという物語で，同様のテーマが用いられていると言えるだろう。しかし，初期の短編小説に特徴的だった子どもたちの静かな諦念や厭世観はこの作品では鳴りを潜め，代わりに，血なまぐさく残酷な殺人の描写，おどろおどろしさ，無残に殺された子どもの激しい怒りが際立っている（同様の傾向は，同時期に発表された「Елкич」や「В толпе」などの短編でも顕著だ）。

この小説では，罪なき子どもたちを殺したローマ軍の兵士たちが少年リーンの幽霊につきまとわれ最後に自滅するが，作中で何度もくり返される少年リーンの「呪われろ，ひとごろし！」という叫びには，無力な子どもたちを犠牲にすることを厭わない社会への作者の激しい憤りが反映されているように思われてならない。

＊長谷見先生の思い出

東大スラヴ文学研究室月曜日 3 時間目の授業は，長谷見一雄教授の「シンボリズム研究」（ゴーゴリの「死せる魂」研究だったときもあります）の時間と決まっています。一年を通して象徴派の作家やゴーゴリの作品などを講読する授業ですが，どんな授業か，一言で言うと，とにかく先に進まない授業です。

それは，先生がテキストの中で気になった言葉を見つけられるたびに，一語一語時間をかけて綿密に解説してくださるからです。先生は，手ずから切り貼りして作ったコピーを配られ，演習室の辞書（アカデミーの 17 巻辞書は言うに及ばず，各種詳解辞典，18 世紀辞典，金言辞典，用例辞典，エチケット辞典，ロシアの風俗辞典，迷信辞典など）を書架から次々に取り出して，ひとつの言葉を丁寧に解説してくださいました。

先生の授業を通して，私たち学生は，ひとつひとつの言葉には長い来歴があること，文学作品を読むときは，作者の頭の中でその一語がどのような意味で，ニュアンスで，用いられていたのかを考えることの大切さを教わりました。「少年リーンの奇跡」も月曜 3 時限目の授業で先生が取り上げてくださった作品です。先生はひとつひとつの言葉のニュアンスまで汲んだ，綿密な解説をしてくださったはずですが……。翻訳にあたっては «Весы» 1906 年 2 号に掲載されたものを底本としました。